

## わが街から失業者を一人も出さないために（再考）

—マニラで考える—

開倫塾

塾長 林 明夫

### 1. はじめに

いくら嘆いていても経済はよくなるのであれば、せめて自分の身のまわりはどうにか守り切ろう。そのためにはどうしたらよいかを考える。

### 2. 我が街から失業者を一人も出さないために

①仕事を終えたと思っている方に。経済危機が訪れば収入が激減するのであるから、いくら一度退職したからといっても、もう一度働き始めることをおすすめする。現代のお年寄りは元気な方が多い。90歳になっても頭は冴え、十分身体の動く方も多い。病気で動けない方は別として、気持ちが元気で身体の動く方は、年齢に関係なく是非働いて1円でもいいから現金収入を得て頂きたい。

病院に行くのは必要最少限にして頂きたい。薬をもらうのも必要最少限度にして頂きたい。昨日は温泉、今日はカラオケ、明日はゲートボール、明後日は病院通いと、毎日毎日遊びほうけ、あそこが悪いここが悪いと必要以上に病院に通わないで頂きたい。自分たちがいくら若いころに苦勞をしたからといって、今の働く人たちにいつまでも「おんぶにだっこ」をしないで頂きたい。日本の経済の状況がガラッと変わったのだから、病気の方以外は、何歳になっても現金収入を1ヵ月1円以上稼ぎ出して、できれば税金も支払い、お互いに社会を支えあって頂きたい。

現在の70歳の方は昔の50歳と同じ。現在の80歳は昔の60歳と同じとよく言われる。そのくらい栄養もよく元気なのが現在のお年寄りだ。元気なのに遊びほうけてブラブラしているのは、単なる「怠け者」にすぎない。孫にも尊敬されない。

②お年寄りの最大の問題は、ここまで元気になってしまった後、何をどのようにしてよいのか、よく判らない点にある。あり余る体力と気力をどう使ってよいか判らない、つまり身の処し方が判らない点にある。理由は簡単で、ここまで長生きをする社会は、日本で今まで一回もなく、長生きをした時どう時間を過ごせばよいかについて誰からも教育を受けたことがないためだ。お年寄りが病院通いをしすぎるのが一つの原因で、国家や地方の財政が破綻寸前なのに、まだまだ飲み切れないほどの薬を出したりする病院もおかしい。平気でその薬をもらってくるお年寄りもおかしい。

\*各市町村では街をあげて「お年寄りの生活の仕方」の「教育」をすべきだ。その中には病院のかかり方、今からでもできる仕事の探し方、再訓練、病気にかからずに長生きできるための健康維持の方法などもカリキュラムに入れて、テキストをつくり指導員を養成して頂きたい。

\*空きそうな保育園、小学校や中学校などを市町村立の大学や大学院にして、大いにお年寄りも社会人同様に「特別学生」で入学させて頂きたい。

正式な教育機関で勉強しているお年寄りも、いつまでも元気で、病院にかかる回数も少ない。言いにくい話で恐縮だが、やり方次第で医療費の負担より教育費の負担の方が2桁もしくは3桁位少なくなる。死ぬ前日まで学校に行ったり、仕事ができる人の方が、死ぬ前日まで何千回も病院通いで過ごす人より幸せなのではないか。

\*ここで1冊の本を紹介する。是非1冊購入してゆっくり何十回も読んで、少しずつでもいいから実際にやってみると、随分と人生が変わってくる本だ。「いつまでも若々しく生きる」(中村天風・述)、1998年2月19日日本経営合理化協会刊。希望の方は03(3293)0041に電話し、注文して下さい。1冊12000円と少し高いと思うかも知れないが、これで「いつまでも若々しく生きる」ことができれば安いものだ。中村天風さんの本の中では最も判りやすく具体的ですぐにできることばかり書いてある。現在90歳の方が読まれても必ず参考になる。まして30歳代ならもっと役立つ。

\*行政の担当者も是非読んで頂きたい。街をあげて「いつまでも若くいきる」方法を徹底的に研究し、それを広めればみんなが喜ぶ。同時に、福祉予算を別な必要なところにまわすことができるからだ。

アジア各国のような経済危機になれば税収は減り、福祉にまわす予算も大幅に減らさざるを得ない。個人も行政も一日も早く自らの解答を捜し出し、何が来ても大丈夫という状態をつくらねばならない。

③経済危機に直撃された場合、最も深刻なのが「失業」問題である。対ドルの価値が80%下落し、インドネシアではこの半年で失業者が全労働者の3分の1になった地域もあると言われる。今までの仕事の仕方ではもう仕事がない。どうしたらよいか。あなたが会社の経営者なら方法は二つしかない。一つはいらなくなった人にやめてもらう。つまり失業者を我が社から出すこと。もう一つは我が社の中で新しい仕事を起こし、そこで仕事をしてもらうこと。これ以外にはない。愛情は別にして、家庭問題の大半は経済問題といえる。家庭内に失業者が出ることは、収入の激減つまり経済問題の発生、家庭内問題の大きな原因となる。ここ何十年間か、日本人はスペインのように20数パーセントといった高い失業率を体験したことがないから、ドイツやフランスのように大パニックになることは必至。再び、ではどうしたらよいか。あなたが会社をやっている「失業者を出す側」だったらどうしたらよいか。あなたが「失業者」になってしまい、新しい会社を探したがどこにも雇ってもらえない場合だったらどうしたらよいか。二つの場合に分けて考えよう。

④あなたが他人従業員を一人でも雇っている会社の経営者なら、辛いかも知れないが、我が社から1名の失業者も出すことのないよう「企業内創業」をぜひ目指して社内の余剰労働力を吸収して頂きたい。そのためには、社長は自分の頭でものを考えず、自分で徹底的にお客様まわりをして、お客様が最も不満に思っていて、最もすぐにして欲しいことに焦点を絞り込み、商品化・サービス化することが大事だ。地べたにはいつくばるような方法でマーケティング戦略を展開し、本当に買って頂ける商品やサービスを見つけることだ。その件について販売業績が出るまで、社長は自ら商品開発部長、営業部長をすること。社長がめんどろがったら、社内創業などはできない。ある程度目途がついたら、今までの社員でもできるように「システム」づくりをすること。

「企業内創業」は、「コーポレート・ベンチャー」とも言う。何をどうしていいかわからない社長は、東京駅の八重洲口から歩いて4～5分のところにある「八重洲ブックセンター」に行き、「企業内創業」とか「コーポレート・ベンチャー」という名前の本を買えるだけ買い、来月号の「みにむ」が出るまで1ヵ月かけて読破すると、我が社から失業者を出さずに済んでよい。

アメリカでは随分事例があるので、英語の本が読める人はハーバード大学やスタンフォード大学、カリフォルニア大学の各校舎などのビジネス・スクールの本を読むとよい参考になる。オックスフォード大学やケンブリッジ大学でも随分研究して本を出している。新宿駅東口の紀国屋などの大型の洋書専門店で見つけてくること。必要なら、それらのビジネス・スクールに短期でも出かけるとよい。(どこのビジネス・スクールで何が教われるかは、ビジネス・スクール案内の専門書で探すこと。)

\*「手法」つまり「何をどのようにしたらよいか」を身につけることを軽視しない方がよい。もしかしたら、社長であるあなたや会長であるあなたのお父さんが会社経営や経営戦略、マーケティングの勉強を怠ったがために、社内から失業者を出す状況をつくり出してしまったのかもしれないからだ。接待や交際費をゼロにしても、社長は自分や経営幹部の勉強のために最低でも毎年300万円はセミナーや宿泊費、視察費のために使わなければ、時代についていく会社経営はできない、つまり社内から大量の失業者を出してしまっただけで何の対処もできないと言える。会社存続のため、社員から失業者を出さないため、どうしたらよいか朝から晩まで365日勉強するのが社長の仕事。そのような勉強をする気力のない人は、気力に満ちた人に経営を任せるくらいでないとこの危機は乗り切れない。

⑤職を失った人は、自分で「創業」をする以外にない。これからこのような人が大量に出てくると予測される。だから、各市町村は、職を自らの意思か、あるいは外の意思かで失った人が新しく創業をするについて、最大限の「あたたかさ」を示し、それを形にすることが大事だ。

すぐにでもできることは、次の通り。

⑥新しく仕事をする人は開業するのにお金がないのであるから、300万円を限度にお金を貸してあげること。

(100万円でもよい。)利子もとらず、1年くらいすえおき、6年以内に返してもらえばよい。その場合は必ず住所をその市町村に移し、その市町村の中に仕事の本拠を置くことを条件にするだけで、他は何も条件をつけない。市町村の中で空いている家や店、工場などを本人に探させ、そこを仕事の本拠にした場合には、家賃や礼金・敷金は1年分市町村がプレゼントしてあげること。銀行でもなかなかできない、創業期の立ち上げを市町村が手伝ってあげ、軌道に乗ったら金融機関に支援をお願いするとよい。

とりわけ35歳前の若者、お年寄りや女性が創業する時には、もっと手厚い援助をきめ細かくすると、「若者・女性やお年寄りの創業を支援する街」として、活力にあふれるものができる。

⑦元気だけはあるが、経営の仕方がわからないのが、創業期の創業者。経営をしたことのあるお年寄りに集まって頂き、市町村がいくらかでも人件費の補助を創業間もない小さな会社に週に何回か1年間でも派遣してあげると離陸(テイクオフ)が上手にいく場合が多い。何百万、何千万もかけて、この街の活性化をどうするかという研究を東京のシンクタンクに頼んでも、何も

やらないのでは税金の無駄使いといえる。アンケート調査やお祭りなど何十回やっても、その時盛り上がるだけで、結果は一向に出ないのが現状ではないか。

⑥一方で社長が死ぬ気で勉強し、企業内創業を果たし、一方で市町村がこれでもかというほど創業者を大事にする細かなことを積み重ねること。この二つを私はとりあえず行うべきと考える。

\* 3月8日から13日までの7日間、マニラ市のウエスティンホテルで開かれた「アジアの経済危機—まだ終わっていない課題」と題する国際会議(世界銀行< <http://www.worldbank.org/wbi/>>・アジア開発銀行< <http://www.adbi.org/>>主催)に参加しながらずっと考えたことをまとめてみました。